

2010年2月3日

東京都中央区長
矢田 美英 殿

社団法人 日本建築学会
関東支部長 新宮 清志

東京都中央区に現存する復興小学校7校舎保存要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴下におかれましては、中央区立の小学校7校（明石小学校、明正小学校、阪本小学校、常盤小学校、城東小学校、中央小学校、泰明小学校）の校舎改修ならびに建て替えを計画しておられる旨うかがっております。とりわけ明石小学校、明正小学校、中央小学校の3校に関しましては数年内に取り壊すことが決められたという報道もありました（東京新聞、平成21年11月25日）。ご承知のように、これら7つの校舎はいずれも大正末から昭和初期にかけて建設されたものであり、関東大震災後の復興事業の一つとして当時の東京市営繕組織が設計した「復興小学校」の秀作としてよく知られるものです。その歴史的価値の詳細は別紙「見解」に示した通りですが、これらの校舎は、特に以下の3点において保存すべき高い価値を有していると考えられます。

- (1) 震災復興の際に東京市が作成した小学校建築の設計規格は、児童の健康と安全を重視し、良好な教育環境を整えるという高い理想にもとづくものでした。その規格にもとづいて設計された各校舎は、当時の東京市の理想の高さを示すという点で、近代建築史上および近代教育行政史上、高い価値をもつ建築物であると位置づけられます。
- (2) これらの校舎の外観のデザインは互いに異なる個性的な特徴を持ち、いずれも表現主義的なデザインによる建築の秀作として高く評価されます。表現主義の建築は当時のヨーロッパで流行していた最新の建築思潮を取り入れたもので、当時の日本においてはきわめて斬新なデザインでした。
- (3) 復興小学校の多くは隣接する小公園と一体的にデザインされ、現在も公園とともに豊かな都市空間を周辺地域にもたらしめています。各校舎の外観は、互いに異なる個性的な表情を持っているので、地域のアイデンティティをかたち作るランドマークとして、現代における存在意義も決して小さくありません。昭和初期とは異なり、都市部に空地が減っている現代において、公園から一望できるその外観は、むしろその景観上の価値を益々高めているともいえます。

かつて 117 校あった復興小学校のうち、現存するものはわずか 21 校にすぎません。そのうち 10 校が現役の小学校として使い続けられています。10 校中じつに 7 校が中央区に集中しています。しかも、その建設年は大正 15 年から昭和 4 年までと震災復興事業の期間のほぼ全体に渡っており、よって中央区は各時期の校舎のデザインの多様性を知ることができるという点でも都内では比類なく学術的な価値の高い地域といえます。そして、これら 7 校の校舎はいずれも等しく「文化財」としての価値を十分に持っていると考えられます。

以上のことから、貴下におかれましては、これら 7 校の小学校建築のもつ文化的価値と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く、またいずれも等しく後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。なお、本会はこの建物の保存に関して、できる限りの協力をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具

2010年2月3日

東京都中央区に現存する復興小学校7校舎についての見解

社団法人 日本建築学会関東支部
建築歴史・意匠専門研究委員会
主査 山崎 鯛介

大正12年の関東大震災により、当時の東京市では100校以上に及ぶ市立小学校が罹災したが、東京市は関東大震災復興事業の一つとして、それらすべての校舎を鉄筋コンクリート造で復興した。その設計は東京市営繕組織が一括して行い、いずれの校舎も当時東京市が作成した設計規格にもとづいて設計された。これら「復興小学校」と称されるもののうち、東京都中央区に現存し、現在も小学校として使用されている校舎には以下の7校がある。以下、まず復興小学校の設計規格の概要を示し、次に各校舎のデザインの特徴について論及し、その上でこれら7校の校舎が有する建築史的価値について述べる。

	起工	竣工	設計担当者	施工
明石小学校	大正14年6月15日	大正15年8月28日	原田俊之助	竹田組
明正小学校	大正15年3月1日	昭和2年5月30日	不明	大林組
阪本小学校	昭和2年2月23日	昭和3年3月15日	三輪幸左衛門	大倉組
常盤小学校	昭和3年3月6日	昭和4年5月15日	不明	大林組
城東小学校(旧京橋昭和)	昭和3年4月20日	昭和4年3月19日	不明	竹田組
中央小学校(旧鐵砲洲)	昭和3年4月20日	昭和4年3月19日	原田俊之助	上遠合名会社
泰明小学校	昭和3年6月5日	昭和4年6月4日	原田俊之助	錢高組

(設計担当者は設計図の「設計」欄の印影による)

1. 建築的特徴に見られる共通点と相違点

(1) 東京市の設計規格の先進性

罹災した多数の校舎を短期間に復興し、なおかつ公共建築として各校舎の公平性を重視するという必要性から、東京市はまず設計規格を作成し、それを全ての校舎に一貫して適用した。その設計規格は、児童の健康と安全に細心の注意を払ったもので、たとえば採光・通風のために窓面積を大きくし、室内換気に配慮して天井高を高くして、児童の安全のために廊下幅・階段幅も広めにとることを指示している。校舎はL字型平面が基本とされるが、中央区では敷地面積が十分取れないことから、部分的に中廊下型を用い、コの字型平面にして対処したものが多い。ロの字型平面の校舎は用いなかったということからも、設計者がいかに採光・通風を重視していたかがうかがえる。また、片廊下型の平面をもつ桁行2.85m×梁間6.90m(普通教室の1/3の大きさ)の構造ユニットを組み合わせることで、平面計画と構造計画を一体的に行えるという、合理的で、よく考えられた設計システムを用いている。さらに、構造は当時の最新の構造技術であった鉄筋

コンクリート造で、最新の衛生設備を備えていた。こうした諸点において東京市の設計規格は、当時の他の市（神戸、大阪、横浜）のものと比較しても、先進的で優れたものであったといえる。

(2) 各校舎のデザインの特徴

・明石小学校

設計の主任技師は原田俊之助（大正 5 年、東京高等工業学校卒）で、最も早い時期に建設された復興小学校の一つである。中央区の復興小学校のなかでも延床面積（約 4,400 m²）が最大級のものの一つである。断面円形の柱形を外に見せ、その上部のパラペットがカーブを描いて張り出している点が特徴的で、そのほかにも随所に曲面を用いて、建物の外観全体がきわめて軽快な造形感覚でまとめられている。とくに東立面は、南側に 2 階建ての特別教室を配することで校庭への採光に配慮しつつ、3 階建ての普通教室部分との高さの違いを、両者の間に 4 階建ての階段室を配することで造形上巧みに処理している。パラペットの曲面と階段室のアーチ形とが複雑に組み合わさるこの部分は、設計者がとくに意を凝らしたところである。復興小学校のなかでも、表現主義的な傾向が顕著な傑作といえる。なお、この周辺に聖路加国際病院 1 号館（1932）やカトリック築地教会（1927）等、昭和初期の歴史的建造物がまとまって残されている点も注目すべきである。

・明正小学校

この校舎は 3 辺を道路に接する敷地にたち、コの字型の平面計画となっているが、交差点に面する北・西の各コーナーは大きな円弧を描く平面となり、とりわけ正面玄関が設けられた北立面は都市景観に配慮してデザインされている。道路に面する 3 つの立面はすべて 3 階で高さを揃え、各階窓の上下、およびパラペット上端に水平の帯を付けることで、道路側の 3 つの立面が水平線を強調した造形で一つにまとめられているという点で、典型的な表現主義の建築といえる。一方、校庭側のデザインは道路側とは異なる表情を持ち、柱形を外に見せ、最上階窓上に庇を付けて、その立面に正面性を与えている。ちなみに、当校は中央区に建設された復興小学校のなかで、教室数・延床面積（約 4,800 m²）が最大である。

・阪本小学校

設計の主任技師は三輪幸左衛門（大正 5 年、東京帝国大学卒）である。柱形を出し、窓はすべて矩形で、最上階窓上に深い庇を付けることで、建物全体にフォーマルな印象を与えている。また、隣接する阪本公園側に 2 つの昇降口を設け、横に長いプロポーションを持つ校舎の北立面は、公園とともに良好な都市景観を形成している。

・常盤小学校

平面計画は、L 字型校舎と体育館を組み合わせた、江戸通りに開くコの字型の平面である。隣接する常盤公園に面して、校舎と体育館の間にアーチ形の表玄関を設け、公園と一体的にデザインされていた（現在は後に増築されたプール等により校舎と公園は完全に分離されている）。柱形を外に見せない点は設計規格と異なるが、立面は水平線を強調したデザインでまとめられ、1 階窓下までを粗石仕上げ、2 階窓下に胴蛇腹（現存せず）を設ける 3 層構成となっている。ただ、階段室は 4 階建てで、胴蛇腹を付けず、2 階から 4 階まで連続する縦長のガラス張りを設け、建

物全体の水平性を破るヴォリュームとして対比的に扱われている。

・城東小学校（旧京橋昭和尋常小学校）

この校舎は、柱形を外に出し、道路側ではその柱形上端を壁面から突出させるが、校庭側では最上階窓上に庇を付けて、表情が変えられている。正面玄関上に設けられた深い庇、その下の持ち送りや門柱等により整えられた南側立面は、設計者が意を注いだところである。また、階段室や体育館の壁面に半円形の開口部を付けたり、シャワー室の東側を半円形平面とするなど、随所にカーブを用いる点に表現主義的な特徴がよく見られる。

・中央小学校（旧鉄砲洲尋常小学校）

設計の主任技師は原田俊之助である。この校舎の立面には、断面円形の柱形を見せてその上に庇を設けるところと、柱形を見せずに壁面を平滑にしているところがある。たとえば、鉄砲洲児童公園（旧鉄砲洲公園）に面する東立面は、中央 10 間は柱形を見せて庇を設けるが、両端（北側 2 間、南側 1 間）は柱形を見せていない。その南側 1 間分（階段室）は 4 階建てとなり、北側に寄っている正面玄関とともに、対称性を崩したデザインになっている。

・泰明小学校

設計の主任技師は原田俊之助である。敷地上の制約から、東西に細長い平面計画になっているが、校庭側の昇降口の上にバルコニーを設けたり、その両脇に庇を張り出させたりして、長大な立面を単調に見せない工夫がされている。この校舎は、柱形を見せない点で設計規格と異なり、3 階窓下に胴蛇腹を付け、その上下を分節化した立面構成になっている。3 階の窓上部がアーチ形となり、体育館の平面が円弧を描く点で、典型的な表現主義の建築といえる。数寄屋橋公園に体育館の大きく湾曲した壁面を張り出し、校舎と公園が一体化した豊かな都市空間を形成している。

2. 建物の文化財的価値

(1) 小学校教育に関する東京市の理想の高さを示す建物としての評価

前記 1 (1) で述べたように、当時東京市が作成した設計規格は、児童の健康と安全に配慮しつつ、良好な教育環境を整えるという、小学校教育に対する東京市の高い理想を反映したものであった。室内換気に配慮して天井高を高くしたことや、採光に配慮して狭い校地でもコの字型平面を遵守していたことに、その理想の高さがうかがえる。また、最新の衛生設備を備え、鉄筋コンクリート造という最新の構造技術を採用した点でも先進的であった。とりわけ鉄筋コンクリート造の建設は当時まだ緒についたばかりであったが、当時の東京市長・永田秀次郎の強いリーダーシップと、その構造法を推進していた建築構造学者・佐野利器のバックアップにより実現したものである。これら 7 つの校舎はいずれもそうした設計規格に従って設計されたものであり、各校舎のプランニングおよび構造は、東京市の理想を具体的に示しているという点で、近代建築史上、および近代教育行政史上きわめて高い価値を有するものと考えられる。

(2) 表現主義的な外観デザインによる建築の秀作としての評価

これら 7 つの校舎は、いずれも表現主義的なデザインをもつ建築の秀作として高く評価される。上記のように、復興小学校のデザインは東京市の設計規格にもとづくものであったから、その平

面計画、架構形式、および各部の寸法にあまり差異が見られないが、その一方で、その設計規格は外観のデザイン（建物の立面）に関する具体的な規制を含まず、設計者も複数であったから、その外観デザインは決して一様ではない。個々の校舎の外観のデザインはいずれも秀逸なものであり、今日でも高く評価できる。

表現主義の建築は、普遍的な美の追究よりも設計者の個性の表出を重視してつくられた建築であり、それゆえ規範に囚われず、曲線・曲面を多用するとか、鋭角を強調するとかといった、自由な造形を行うことをその特徴としている。事実、これら復興小学校の外観を見ると、それが設計規格にもとづくものであるにもかかわらず、それぞれが個性的である。個々の校舎のデザインの特徴は前記1(2)で述べたが、そこに共通する表現主義的な特徴をあげれば、(a) 建物の平面や出隅に曲面をよく用いていること（明石小、明正小、常盤小、泰明小）、(b) 建物の開口部にアーチ形（尖塔アーチを含む）を多用していること（明石小、明正小、常盤小、城東小、中央小、泰明小）、(c) 外部に現した柱形や、蛇腹、庇などにより外壁に凹凸を多く持たせ、立面全体を一つの造形にまとめていること（明石小、明正小、阪本小、常盤小、城東小、中央小、泰明小）などである。また、建物の色についても、モダニズム建築の特徴である「白」を基調とした明快な色を用いず、「茶褐色」（中央小）や「ダーククリーム」（泰明小）等、様々な色を用いるという点で表現主義的といえる（ただし建物外壁の色はほとんど現存しない）。

(3) 都市計画的な観点にもとづく建築計画としての評価

東京市は都心部に建てる小学校校地が狭隘であることを認識し、それを補うために小公園を隣接してつくり、なおかつ非常時の避難場所としても使えるようにした。こうした小公園として、明正小の越前堀公園、阪本小の阪本公園、常盤小の常盤公園、中央小の鉄砲洲公園、泰明小の数寄屋橋公園がある（名称はいずれも建設時）。そのような都市計画的な観点にもとづく建築計画が行われたことも注目される。これらの小学校は、いずれも公園側に昇降口を設け、公園側の外観のデザインにとりわけ意を注ぎ、校舎と小公園が一体化した豊かな都市空間を形成している。

復興小学校は「帝都復興」のシンボリックな存在である。いうまでもなく小学校建築は学区に一つ存在し、その学校に通う子供の家族を含めた近隣住民と密接な関わりをもつ建物であるし、とりわけ木造が中心であった昭和初期の町並みにおいては、鉄筋コンクリート造3階建ての校舎は際立って目立つ建築物であったはずである。同じ設計規格により同時期に建設されたそれらの校舎は、それゆえにデザインの統一性を持ちながらも、前記のようにそれぞれの校舎で設計者の個性が発揮された特徴的な外観のデザインをもあわせ持っているから、それらの校舎は、各周辺地域のアイデンティティをかたち作るランドマークとして、都市景観上きわめて高い価値を有していると考えられる。



明石小学校



城東小学校（旧京橋昭和）



明正小学校



中央小学校（旧鐵砲洲）



阪本小学校



常盤小学校



泰明小学校